

篁

北原白秋

青空文庫

序

我が長歌の総てを収めて、此の『篁』を成す。主として小田原の山荘にありて、竹林の日夕を楽しみ、移りゆく季節の風と光とに思を寄せたる、そのをりをりの古体を蒐めたり。

かの山荘はまことに篁の中にありて、その蕭々の音は、常に颯々たる松籟に唱和し、簡朴にしてそぞろに幽致にも満ちたりしかど、震災後、大破して繕ふに由なく、ただ辛うじて住むを得たりき。

我が長歌も亦かくのごとし。長歌とは言へども、あながち万葉

の古体にもあらず、貧しき詩魂は時に新様の我趣を求めて、自ら姿容を破る。もとより流通するところの所縁ただに和歌の一体に繋ることをのみ幸とすべきか。また言ふところ無し。

昭和四年 暮春

白秋

竹と我 序歌

眺めても眺めあきずよ 親しめば親しむがまま 幽けきもありの
さながら かかはらず またさまたげず 竹は竹 我は我ゆゑ
竹がうれしも

言祝

言祝

大君。日の本の若き大君。神かんながら朗らけき現人神あらひとがみ。青空やか
ぎりなき。国くに土つちやゆるぎなき。万づ世の皇みすまる統すめみま。皇孫や天津
日繼。ああ、我が天すめらみこと皇。大君。道の大君。大稜威。今こそは
依り立たせ、けふこそは照り立たせ。高御座たかみくら輝き満つ、日の御み
座くらただ照り満つ。御劍や御光添ひ、御璽みしるしやいや栄えに、数多かずさは
の御鏡や勾玉や、さやさやし御茵みしとねや、照り足らはせ。大君。我
が大君。現あきつ神かみ。神ゆゑに、雲の上の生日いくひの光采とりてますかも。

最勝閣にまうでて

最勝閣にまうでて詠める

長歌ならびに反歌

風速かざはやの三保ほの浦廻うらみ、貝島のこの高殿は、天あめなるや不二をふりさ
 け、清見瀉みちひ満干の潮に、朝日さし夕日照りそふ。この殿にまうで
 て見れば、あなかしこ小松むらお叢生むらおひ、辺へにい寄る玉藻いろくづ、た
 またまは棹さす小舟、海苔のり粗朶そだの間あひにかくろふ。この殿や国の鎮
 めと、御みほとけ仏のりの法の護りことと、言ことよさし築かしし殿、星ほしづくよ月夜よ夜空

のくまも、御^{みひさし}庇のいや高々に、鐸^{すず}の音^ねのいやさやさやに、いな
 のめの光ちかしと、横雲のさわたる雲を、ほのぼのと聳えしづも
 る。しづけくも畏^すき相^{がた}、畏くも安けきこの土^ど、この殿の青^いき麓^{らか}の、
 あやに清^{すが}しも。

反歌

この殿はうべもかしこし白妙の不二の高嶺をまともにぞ見る

春
鶉

冬ごもり

冬ごもりうらさびぬらし。隣りべは日のあたるよと、萩も枯れ萱
も枯れぬと、よろしよと、見つつぬくもる、吾が和なぎごころ。

反歌

おのづからうらさびぬらし萩の戸のへだての垣も枯れて匂ひぬ

日あたり

つれづれと眺めあかぬを、枯れしとて萩は刈られぬ。ほほけしと
薄も刈りぬ。ほのぬくみ刈りつる人も、うちたばね、かつぎてい
にぬ。日あたりの、となりの庭の、そのよろしさを。

反歌

枯れはてて萩は薄は刈られける日のたむろべのよろしみ来るを

ととのはぬ春

春はまだととのはざらし。土かづく黄の福寿さう、露の臺、菱しなへ
 葉の霜の苳や、裏藪の小すみれもまだ、しもと枝べのつくつくしまだ、
 日あたりの枯れし芝生の、したも下萌えもまだ。

をさなき春

土見れば土の香か立つを、はなはだし、春はをさなし。露の臺いづ
 らにふふむ。つくつくし萌え立つやいつ。置く霜のややに浅くも、

こぬか雨ややに繁くも、裏藪や、莖さく辺べの、いまだなじまず。

反歌

隣りべの春もをさなしたき火して梅のつぼみをしたしとを見れ

見え来る春

かにかくにうつらふ冬や、隙間洩る風を寒むみと、破やれはてし家
にこもると、はららうつ雨のこまかに、置く霜の置くと解とくれば、

ぬ。
 ふる地震なみのふると消けにつつ、おのづから霞立つ日ののどけくなり

反歌

いつしかとなごに來ぬらし 向むか山やまの地震なみの壊くえ土萌えかすみつつ

福寿草

冬ふゆごもり、こもりあかねど、寒き日は吾あもちちまりぬ。春まつと

妻は急^せけども、のどならむ家も壊^くえたり。子が愛^めづる薄葉鉄^{ブリキ}の太鼓、その紅^{あか}き片^{かた}面剥^もげしに、土盛りて、せめて植^うゑむと、福寿草霜に抜き来ぬ、二株三株。

反歌

児が愛^めづる薄葉鉄^{ブリキ}の太鼓剥^うがれたり植^うゑて眺^{のぞ}めむ福寿草のはな

春鶉

おもしろの春や、この朝、花しろき梅のはやしに、をさな鴟もず来て
 ををりける。草餅の蓬よろしと、黄粉きなこつけ、食みつつきけば、い
 はけなの鴟や子の鴟。ふふみ音ねの、まだなづむ音ねの、うぐひすの
 鳴まねびをる。頬白のふりまねびをる。しづ枝えゆり、ゆり遊あそびを
 る。移り飛とびをる。

反歌

梅おほきとなりやかたは明るくて花のさかりををさな鴟飛とぶ

あるとき

春鳥の枝えに揺る声の、ゆく水のかがよふ音の、朝風の松のひびき、
夕風のささ小竹のさゆれの、おのづから我よあはれと、あはれにも恍ほ
れて、しらべて、あるべきものを。

反歌

一ひといきに歌ひ成してぞおもしろきこのごろくやし思ひ凝りつる

のどか

子よあそべ、父も遊ばむ、母呼ばむ、来り遊ばむ。日あたりにつくしも立ちぬ。つくしべに蓬も萌えぬ。枯萱の裏むらさきの、ほのぬくみ、かがやく根にはあなあはれ、白きなづなの花も群れたる。

反歌

うらなごむ春日よろしみ蓬生や花のなづなを踏みて暮しつ

匂だちとみに春めく蓬生の下べのしめり踏めばかなしも

春の草まだやはらかしとりまぜて摘むとためけり子ろが帽子に

つくし

土筆摘み、妻と子と摘み、うすあかき土筆の茎の緑だつその秀^ほの
 粉^{こな}の、かなしとも吾^あも妻も摘め、をさな児もしみみ摘みをる、そ
 のをさなさを。

反歌

一つ一つ摘みし土筆をつくづくとまた植ゑてをりもとなをさな児ひと

種子蒔き

鍬入れて、繁しげに篩ふるひて、搔かきならず土はよき土。春雨のよべのし
 めりに、けさ蒔くや、種子はひなげし、金蓮花、伊勢のなでしこ。
 向日葵は間まをよくあけて、枇杷のべに糸瓜は寄せて、蒔かずしも
 朝顔夕顔、おのづからまかせたらなむ、垣の根かたに。

反歌

盛る土に足あとつけて子も蒔くと画ゑの種ぶくろ日にかがやきぬ

このごろは

このごろはくつろぎにけり。歌よめばよくもあしくも、墨磨ほれば
濃ほけれうすけれ、うれしくも慌ほれて書きけり、かなしくも慌ほれて
書きけり、ただ楽しみて。

反歌

歌ふらくおのれ楽しむものならし楽しみてあらむひとりこもりて

双柿舎 熱海遊草

おもしろこさめの春の小雨や、うら向けに羽織かぶりて、つゑかつきぎ、石
 いくつ飛び、童わらべさび、声うちあげて、翁こそ帰り来ましぬ。柿が
 もと、白梅がもと、かうかうと帰り来ましぬ。先生らしも。

反歌

柿ふたき双樹梅いづみもと五三本この庭のさましづかなりこさめなが小雨流らふ

多摩の浅春

造り酒屋の歌

水きよき多摩のみなかみ、南むく山のなぞへ、老杉の三鉾五鉾、
 常寂びて立てらくがもと、古りし世の家居さながら、大うから今
 も居りけり。西多摩や造酒屋は門櫓いかしく高く、棟さは
 に倉建て並め、殿づくり、朝日夕日の押し照るや、八隅かがやく。
 八尺なす桶のここだく、新しぼりしたたる袋、庭広に干しも列ぬ
 と、咽喉太の老いしかけるも、かうかうとうちふる鶏冠、尾長鳥
 垂り尾のおごり、七妻の雌をし引き連れ、七十羽の雛を引き具
 し、春浅く閑かなる陽に、うち羽ぶき、しじに呼ばひぬ。ゆゆし

くもゆかしきかをり、内外うちとにも満ち溢るれば、ここ過ぐと人は仰
ぎ見、道行くと人はかへりみ、むらぎもの心もしぬに、踏む足の
たどきも知らず、草まくら、旅のありきのたまたまや、我も見ほ
けて、見も飽かず眺め入りけり。過ぎがてにいたも酔ひけり。酒
の香の世々に幸さきはふ、うまし国うましこの家やぞ、うべも富みたる。

反歌

大御代の多摩の酒屋の 門かどやぐら 櫓ぐら 酒の香さびて名も古りにけり

西多摩の山の酒屋の鉾杉は三もと五もと青き鉾杉

餅搗きの歌

武蔵野や多摩のみなかみ、御嶽道みたけみち 弘沢ほつさはの口、春浅き日南ひなたのそ
 とに、餅搗くや爺は杵とり、白のべや婆は手に捏ね、ぽたらこと
 のどむかに對ひゐ、ぽたらこよゆるにとめぐる。閑しづかなるここのらの里
 も、雛祭ちかづきぬらし。御形ごぎやう咲き蓬萌えたり。古りぬれど雛
 もかざれり。山もあり川もありけり。こもり啼く子ろも居るらし。
 道みちほこり 埃ほこり しろじろ立てて、吹き過ぐと風はさむけど、雲ゆけば日
 ざし洩れ来て、おのづからうら安の世や、ぽたらこと爺は杵とり、

ぼたらこと婆は捏ねつつ、水凧する。

反歌

春なれば草の蓬も搗きこめてのどかなるらし餅搗きをもちひる

道のべののどの餅搗きおもしろと見つつあかすも杵の手ぶりを

めぐり見つつ見つつあかすも搗くたびに杵にのり来る餅のふくらみ

搗きたての餅もちひならずとしろき粉の米の粉まぶし手にたたきをる

道のべの春

きさらぎや多摩の山^{やま}方^{かた}、まだ寒^あき障^{あかり}子の内、人影の、手に織
 る機の、ていほろよ箴^{をさ}うつらしき。立ちとまり、うつらに聴^きけば、
 からりこよ、杼^ひの鳴るらしき。三^{みつ}杈^{また}の花咲^しき湿^{しめ}る、山の井の、
 下井の水も滴^たるらしき。

反歌

障子あかりどにすずろにひびくをき箴をきの音山辺の春はすでに動きぬ

山かげの懸樋かけひの縁へりの紐ひも氷柱つらら本末もとすゑほそうなりにけるかも

木彫の人形

月光と魚 支那の木彫人形 その一

爺をぢが張る四つ手の網に、月さしていろくづ二つ。その魚のくちび
 る紅あかき、この魚の背の鰭青き、現うつとも思もへばつめたく、幻と見れ
 ば霧きらひつ。けだしくも息づく物の、水よりは空や明るき、水離さか
 り空やさみしき。春浅き潯陽江の、この月の魚。

反歌

月蒼き潯陽江の春浅しふなべり低め四つ手張りたる

たださへや月の光は霧きらふらし四つ手に跳はぬる水の江の魚

口あけしぼちりと紅くそめにけり小さき木彫のいつくしき魚

魚売り 支那の木彫人形 その二

魚売りの爺をぢが日永や、ふち広びろの菅の編笠、たよたよと担おほこ棒かつぎ
て、はらはらに片手まはして、前籠まへかごに魚かすくなき、後あとの籠魚か
多かる。後の籠地にしひきずる、重かるらしも。

反歌

菅笠の爺をぢが日永となり
にけりになひの籠のうしろさがりに

米と雁 支那の木彫人形 その三

米つくと、杵は踏みあつ。雁射ると、弓弦張ゆづるりあつ。足に踏む、
をかしかりけり。手にし張る、あはれなりけり。米つきは下べ見
てあつ。雁射るは空べ見てあつ。とざまかうざま。

反歌

米つくとうつらうつらに踏む杵のこなた踏む時かなたあがりぬ

雁射ると弓弦^{ゆづる}ひき放ち^そ反る弓の小手にくるりとかへりたるらし

荒彫の牛 生蕃作品

高砂の牡丹社の子か、命こめ、荒く彫りけむ。つたなけど^{しづた}静立つ

牛の、をさなけどゆゆし力や。男^をごころよ、ひたぶる恋ふと、下
 ふかく燃ゆる思の、えは堪へね、なほし堪ふると、遊びつつ、遊
 び彫りけむ、くるしくも寂^さびつつ寂^さびけむ、外^とには見せずも。

反歌

荒彫の木彫の牛のみぎり角ほきり欠きたり思ひかねきや

水仙と菊

〔「水仙と菊」の章に〕

浅春

春はまだ浅き菜畠、白き鶏とり日向あさるを、水ぐるままはるかたへの、窓障子さみしくあけて、女めの童わらべひとり見やれり、外との青き菜を。

反歌

この春や水車するしやが立つる水だまの早や大きなり芽柳のもと

孟宗と月

孟宗と月

〔「孟宗と月」の章の長歌「孟宗と月」の末尾に〕

反歌

物すごき孟宗藪の月あかりかげるかと思れば騒ぐ葉の影

秋山の歌

〔「秋山の歌」の章に〕

水之尾の秋

この秋よ、雲は白うて、事もなき世にしあるかな。山村のここの
 水之尾、樋ひのへりにみそ萩さきて、みそ萩に水だまはねて、水ぐ
 るまやまずめぐれり、その水みなくち口に。

反歌

水ぐるままはる樋口のかがやくは夕日か水にさしあたるらし

岡の鉾杉

榧と栗

〔「岡の鉾杉」の章の長歌「榧と栗」の末尾に〕

反歌

この寺の老木の栗のいが栗はまたすがれたり榎の木のみへ
榎は榎さしも青けど落葉木の栗は栗とて枯れにけるかも

米の白玉

米の白玉

〔「米の白玉」の章の長歌「米の白玉」の末尾に〕

反歌

米櫃に米のかすかに音するは白玉のごとはかなりけり

童と母

麻布山

〔「童と母」の章の長歌「麻布山」の末尾に〕

反歌

垂乳根と詣でに來れば麻布山子供遊べり日のあたりよみ

母と來て佇み目^ま守^もる日のたむろ子等が遊びのいつはつるなし

童と母

〔「童と母」の章の長歌「童と母」の末尾に〕

反歌

急に涙が流れ落ちたり母上に裾からそつと蒲団をたたかれ

老いしアイヌの歌

老いしアイヌの歌

アイヌはよ、老いしアイヌ。神アエオイナ、アイヌ・ラクグル
 (アイヌの臭ひある人)の後、神かんながらはこべの頭かしら、土の体たい、柳の
 背骨、シネ・シツキ・プイコロクル(眼窩の人)神々の髪の毛の
 人。彼こそはげに、カムイ・オトプ・ウシユ・グルなれ。

彼アイヌ、眉毛かがやき、白き髯胸にかき垂り、家屋チセの外とに萱畳
 敷き、さやさやと敷き、巖いっかしきアツシシ、マキリ持ち、研ぎ、
 あぐらゐ、ふかぶかとその眼凝これり。

彼アイヌ、蝦夷島アイヌモシリの神かみ、古伝神オイナカムイ、オキクルミの裔すゑ。ほろびゆく生ける屍ライゲル。夏の日を、白き日射を、うなぶし、ただに息のみにけり。

彼アイヌ、家屋チセの空見ず、さやら葉の青の長葉の、アイサク・ピヤパ（髯なき稷）フレ・ピヤパ（赤き稷）チャク・ピヤパ（はぜ稷）ヤムライタ・ヨコアマム（藪虱に似し稷）、また、脚高の熊ペウレツプチセ、檻こ仔の熊の赤き舌見ず、汗垂らし、拭ひもあへず。

彼アイヌ、老いたる鷺、古り皺み、病み倦んずる者。ましら髯、

いつかしきアツシシ、マキリ持ち、研ぎ、あぐらゐ、オンコそぎ、心恍れり。

彼アイヌ、よく黙しもだ、念じ、かつ、しかく黙せりもだ。彼、キム・ヲ
 ・チパスクマ（山の教義）の徒、チクニ・アコシラツキ・オルシ
 ユペ（樹の守護の教義）の徒、地上の者、聖シランパの子、黙想
 者、聖トボチの僕しもべ。彼はかく念ずらし。アトニ・ウエンユク（悪
 楡）よ去れ。ニ・アシユ・ランゲ・グル（をを汝立木人よ）キサ
 ラハ・ランゲ・シヌブル・カムイ（をを汝木の皮の尊き鬼神よ）
 オー・トイヤン・クツタリ（汝地上に拡張せる者よ）総て善し、
 吾あは拝せり。吾あは老い、吾あは嘆けり。吾あは白し、早や輝けり。吾あ

は消えむ、ああ早や、吾が妻、吾が子、吾が弟、吾が族の、残れる者、ことごとく滅せん。オンコ（いちゐ）よ、吾が削る、紅柔き兎の肉なすオンコよ、しかく光らん。

彼アイヌ、老いたる鷲。蝦夷島の神、古伝神、オキクルミの裔。ほろびゆく生ける屍、光り、かつ白き屍。彼アイヌ、眉毛かがやき、白き髯胸にかき垂り、巖かしきアツシシ、マキリ持ち、研ぎ、あぐらゐ、夜なす眼の窩のアイヌ、今は善し、オンコ削ると、息長に息吹き沈み、恍れ遊び、心足らふと、そのオンコ、たたりたたりと削りけるかも。

長歌創作年表

大正五年五月（葛飾にて）

童と母

麻布山

大正六年二月（葛飾にて）

夜の雪

鳥の啼くこゑ

大正十年六月（葛飾にて）

アツシジの聖の歌

米の白玉

犬と鴉

立枯並木の歌

潮来の入江

大正十一年一月（小田原にて）

黎明の不尽

遠山脈の歌

秋山の歌

湯どころの秋

竹と曼珠沙華

竹の林の歌

蝸の歌

岡の鉾杉

榧と栗

孟宗と月

冬
の山岨

冬
の棚田

荒浪千鳥

落葉行

落葉吟

水仙と菊

竹林の早春

元旦の夜のこと

露の臺

聴けよ妻ふるものあり

ころころ蛙の歌

大正十二年三月（小田原にて）

造り酒屋の歌

餅つきの歌

道のべの春

浅春

大正十四年二月（小田原にて）

水之尾の秋

大正十二年九月（小田原にて）

竹と我

大正十三年三月（小田原にて）

最勝閣にてよめる長歌ならびに反歌

大正十三年四月（小田原にて）

冬ごもり

とどのはぬ春

日あたり

をさなき春

見え来る春

福寿草

春鴟

あるとき

のどか

つくし

種子蒔

この頃は

月光と魚

魚売

米と雁

荒彫の牛

大正十四年四月（小田原にて）

双柿舎

大正十五年一月（小田原にて）

老いしアイヌの歌

昭和三年十月（世田ヶ谷にて）

言祝

附記　：以上は潮音（大正五年）三田文学（大正六年）行人

（大正九年）大観（大正十年、十一年）日光（大正十二年、十三年、十五年、昭和二年）改造（大正十三年）行楽（大正十四年）婦人の友（昭和三年）等に発表せられたるところに係る。

なほ「童と母」「麻布山」の如きは葛飾に於て成れりと雖も、その取材に至つては曩の麻布の生活に得

たるものなり。

青空文庫情報

底本：「白秋全集 8」岩波書店

1985（昭和60）年7月5日発行

底本の親本：「長歌集 篁」梓書房

1929（昭和4）年5月20日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「水仙と菊」（「浅春」を除く）、「水郷冬景」、「函嶺の冬」、「孟宗と月」（「孟宗と月」の「反歌」を除く）、「秋山の歌」（「水之尾の秋」を除く）、「岡の鉾杉」（「榎と栗」の

「反歌」を除く）、「米の白玉」（「米の白玉」の「反歌」を除く）、「童と母」（「麻布山」の「反歌」及び「童と母」の「反歌」を除く）は底本では「観相の秋」との重複のため省略されています。

※大見出し「水仙と菊」「孟宗と月」「秋山の歌」「岡の鉾杉」「米の白玉」「童と母」、中見出し「浅春」「孟宗と月」「水之尾の秋」「榧と栗」「米の白玉」「麻布山」「童と母」は底本では見出しの体裁をとっていませんが、ファイル作成時に見出しとして追加しました。

入力：岡村和彦

校正：フクポー

2017年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

篁
北原白秋

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>